

第 62 回番組審議会議事録

1. 開催年月日 平成 28 年 12 月 19 日(月) 午前 10 : 30 ~ 12 : 00
2. 開催場所 COM 倶楽部会議室 (箕面市船場東 2-5-47 COM3 号館 5 階)
3. 委員の出席 委員総数 7 名
- 出席委員 7 名
- 出席委員の氏名 稲垣千秋、須貝昭子、稲井信也、桑田政美
中村保、高谷和彦、神垣美代香
- 放送事業者側出席氏名 藤井 栄治 (取締役統括部長)
大平麻由美 (編成課長)
野間 耕平 (編成課員)
4. 議 題 1) 番組 「図書館だより」(「デイライトタッキー」内)
「幸四郎の届け言霊」(「デイライトタッキー」内)
2) 審議
3) その他番組に対する意見
5. 議事の概要 事務局挨拶の後、稲垣委員長が議長となり審議となる。

6. 審議内容

1) 番組

(1) 事務局より番組説明

<「図書館だより」(「デイトラックター」内)について>

箕面市立図書館からお薦めの一冊を紹介しています。市立図書館の司書が、図書館所蔵の一般書・児童書の中から毎週一冊を選び、原稿にします。その原稿を、パーソナリティが紹介しています。

開局3年後から放送しているコーナー。箕面市立図書館と連携し、市内の各図書館の司書のかたが、図書館所蔵の本の中からお薦め本を選び、本の紹介文を原稿におこします。

放送日の一週間前までに送ってもらい、パーソナリティもその本を読んだ上で、司書のかたが書いた原稿を読み上げ、その後、独自の感想も加えています。

過去にご紹介した本のタイトルは、箕面市立図書館ホームページ内「タッキー816みのおエフエムで紹介した本」のページでご覧いただけるほか、各図書館には、紹介した本を集めたコーナーが設置されています。また、情報紙「まちの情報箱」では、2冊をピックアップして紹介文を編集し、掲載しています。

パーソナリティの千波留は、このコーナーで知った本も含め、新旧和洋取り混ぜた50冊を、書評『パーソナリティ千波留の 読書ダイアリー』として出版もしています(市立図書館にも置いています)。

ラジオを通じて、読書の幅を広げていただき、図書館へ足を運んでいただけるように丁寧にご紹介する、いわば読書ナビの時間です。

<「幸四郎の届け言霊」(デイトラックター内コーナー)について>

箕面在住の言霊アーティスト 石本幸四郎さんから、生きる上でのヒントになる言葉についてお聞きしています。幸四郎さんは弱視で目が見えにくいというハンデを抱えながら、世界一過酷なマラソンと呼ばれる「アタカマ砂漠マラソン」に参加。

語り口や雰囲気から穏やかな印象を受けますが、強い意志をもって、自身の赴くままに人生を歩まれています。

お聞きいただいた内容は、「アタカマ砂漠マラソン」から2カ月経過した12月の放送です。

「アタカマ砂漠マラソン」は、チリのアタカマ砂漠（250km）を7日間かけて走りきる、昼間は気温が摂氏40度以上、夜は氷点下にまで下がるという、「世界一過酷なレース」の一つです。幸四郎さんは2015年にチームで参加され、チームとしては成功されましたが、個人としては途中棄権され悔しい思いをし、今年リベンジを果たしました。挑戦前から毎月本番に向けた意気込みを話されていました。

パーソナリティが通う美容室に、幸四郎さん自作の言霊のポストカードが置かれていたことがきっかけで、2015年4月にゲスト出演していただきました。そして、同年夏頃から月に1回のレギュラーコーナーになりました。

放送では、トーク内容に沿って、スタジオで必ず「今月の一文字」を書いていただき、その一文字にかけた思いを語っていただいています。聞いていて心が元気になる内容を心がけています。

（2）審 議

<図書館だより>（「デイライトタッキー」内）について>

委員長：事務局から番組説明がありました。それではさっそく番組審議をお願いします。

委員 A：図書館に足を運んでもらうという意味で、ぜひ継続してほしい。パーソナリティは、けっこうしっかり本を読んでいるという印象があった。その一方で、少し物足りない。図書館の職員の原稿を代読する訳だが、その人がなぜこの本を選んだのか、その辺の思いが、ストーリーはよく伝わってくるが、少し足りないと感じた。できれば本人が電話などで出演し、対談式でやる、もしくは、発想の転換で、映画を紹介するような形で、面白みや思いを伝えるというのも一つの手かと思う。

委員 B: 本の紹介を、パーソナリティがもう少し丁寧に扱ってほしいと感じました。

私は内容が伝わらず、図書館に行って読みたいなという気分にはなりませんでした。ラジオを聴いている人がどうかをイメージしてその本を伝えていただきたいと思います。

委員 C: コーナーそのものは図書館の所蔵する本を一冊でも多く紹介するという機会を作っており、いい番組と思いました。先にも同じ話が出ていましたが、あくまで司書が書かれた原稿をパーソナリティが読むだけではなく、紹介者の司書のかたが生の声でお話しされる方がいいんじゃないかと思いました。生だとその本を選んだ本当の気持ちが、聴いている人にも伝わるし、読者もそれを選んでみよう、読んでみようという気持ちに、よりなりやすいという感想を率直に受けました。

事務局: 補足で説明します。もともと開局3年後から始まった長寿コーナーで、これまでいろいろなパーソナリティが担当してきました。もともとは図書館の人が書いた原稿を読むだけのコーナーでしたが、現在のパーソナリティになってから、原稿を読むだけではなく、自分も本の内容をしっかりと読んで紹介したいということになり、今の形になっています。毎回、本をしっかりと全部読み、その上で自分の感想も付け加えて紹介していますので、もともとのコーナーからは内容が肉付けされています。

委員 D: この5分間を長く感じさせるか、短く感じるかというのが「内容」ということになるんでしょうけど、単にぱらっと紹介するだけならいいが、やはりパーソナリティが意見を言っているのだから、もっと独自性のある、個性豊かなものを打ち出すと、ファンがつくとか、聴く人が面白く感じて、続けていけるいい番組になるのではないかと思います。

委員 E: パーソナリティが、本を全部読んでおられるので、解説は丁寧だなと思いましたし、5分の長さというのも適度で違和感は全然無かったです。ただ、ぱっと聴いたときに「どうして司書本人がしゃべらないの？」というのはみなさんが指摘したように、やはりラジオの番組なので、本人が出演して本人の声で伝えて、そこにパーソナリティがつっこんでいくというのがいいのではないかと思います。本人が出演するというのはいくつか意味があって、一つはラジオというのがコミュニケーションツールなので、リスナーが「ラジオ聴いたよ」と図書館で司書とそういうやり取りが広がる、そ

の意味は大きいと思います。お客さんと図書館とのコミュニケーションが、番組を通じてできる、そういうようになればいいのかな、と思います。それと、放送時間帯を考えて、その時間の対象リスナーに対して、放送局側から「こういうターゲットでおすすめ本は何かありますか？」と、こちらからリスナーの層を想定しておすすめ本を選んでもらうことも、あってもいいのかな、と。本人の問題と、リスナーとの関係での、タッキーの意図というのが、気にかかります。

委員 F：パーソナリティが原稿を読み上げるという形だったので、少しもったいない気がしました。この司書のかたはどんなかたで、なぜこの本を選んだのだろうというのは思いました。物語については、耳から聴いただけでも「あっ、面白そう」という思いが伝わり、本を読みたいという気持ちを起こさせる番組作りで、いいなあと思いながら聴きました。たかだか5分で、あれだけの情報をきちんと伝えているというのは素敵だと思います。

委員長：番組でいろんな本の紹介をしていただいているのは、自分にとってものすごく勉強になるというか、自分が読んでなくてもいろんな本の紹介で内容をかじっていけるというか、ありがたく思いながら聴いていました。聴くともなく聴きながら、知らない間に知識が入ってきたな、と。せっかく今までやってこられたので、より一層レベルを上げて、司書のかたはどういうかたなのか、なぜその本を選んだのかということや、どういうリスナー層を設定していくのか、今月はこんな層、今年はこの層に向けてやっていくというようなことも想定して、もうちょっと厚みと深みを持ってやっていけばいいかと思います。

委員 E：一つだけ言わせていただくと、制作の手間を一つ加えてほしいです。大変だとは思いますが、原稿を司書のかたが直接読む、それだけでかなり違ってくると思います。月に一回でもいいので、いつも出ていただいている司書のかたに、生の声で出ていただくという一手間をかけるのが、もっと続いていくための手だと思います。他の番組でも言えることですけどね。

委員長：確かに、ちょっとした味付けで番組が変わることもありますので、大変だと思いますけど、こういったご意見を参考にさせていただけたらと思います。

<「幸四郎の届け言霊」(デイトタッキー内コーナー)について>

委員 A:「言霊アーティスト」がいるというのは初めて知りました。パーソナリティがベテランだけあって、うまく引き出していますね。内容についてはとやかく申し上げることはありません。最後の一文字の、認識の「認」、これの解説についてはなるほどと思いました。面白かったと思います。最後の言霊の部分が、もう少し長くしっかりしていれば、もっと聴きやすかったかなと思います。

委員 F:すごくお話が穏やかで聴きやすいかただと思いました。このかたを発掘したというか、たまたま美容室に置いてあったポストカードにアンテナを張る力というのにも必要だなと思いました。そのかたに来ていただいて、しかも番組をずっとできるという、こういう企画につながったのは、人を見つける力が番組作りには大切なことだと思いました。こんな人が箕面にいるんだと知るきっかけになったし、改めて気づかされる番組で、非常に面白かったし、トーク形式で耳に心地よかったです。

委員 B:私も「言霊アーティスト」というジャンルがあるのを知りませんでしたし、パーソナリティが上手に引き出して、あそこを聞きたいというのが全部詰まっていて、あっという間にこの時間に聴き入ってしまいました。

委員 C:トーク番組の宿命かもしれませんし、マイクの使い方なのかなとは感じたんですが、聞き取りにくい会話が全体を通して感じられたのは私だけでしょうか。

委員 D:私も大変いい番組だと思いました。まず、幸四郎さんが弱視で目が見えにくい、というハンデがありますが、これが本当にハンデなのかわからない、というのも今は左手のピアニストもいますし、克服した人、ある一線を越えた人というのは、自分のハンデを生かして、生活されている人が多いですよ。集中力などの点で、逆にうらやましいところがあります。過酷な七日間のレースにも、再挑戦してでもかなえてしまうという凄さがありました。なんととっても、聴いていて心地よい声のトーンというのがありますよね。この声ですごく得していますね。番組内容もいいですし、特に人の思いやエネルギーの可能性について語っておられ、それも素晴らしいなと思いました。機会があれば、何回か聴いてみたいという印象を持ちまし

た。

委員E:初めて聞く人は「これ、なんだろう?」と思ってしまうのでは。「アタカマ」とか「レース」とか、予備知識なしに聴くと、そういう言葉がぽつぽつ出てくるんですけど、何のことやら一つも分かりません。「今月の一文字」の所は、さすがという感じもありましたが、「言霊アーティスト」というのもそうですし、単にひねっているだけではわからない。ただ、当然以前出演のときにいろんな説明はされていると思うので、常連向きの番組かなと思いました。少なくとも、番組の冒頭で言霊のこととか、何か説明を入れておく必要があるのではないのでしょうか。「このコーナーは、言葉のことを云々する石本さんのコーナーです」とかね。その辺が、いきなり聴くとちんぷんかんぷんになってしまいます。

7. 審議機関の答申又は意見に対してとった措置の内容及び年月日

なし

8. 審議機関の答申又は意見の概要の公表

自社放送

事務所への備置

ホームページ (<http://company.minoh.net/>)

上記事項を明確にするため、この議事録を作成する。

平成 28 年 12 月 19 日

箕面FMまちそだて株式会社

番組審議会